芭蕉翁真跡集

完

911.3
バ

芭蕉翁真跡集序

蒼頡書始作文字以來世代
さまざまの変化の主義之主旨
中國乃尊圖之初祖と始
なす王道の始末筆と
教学の要と墨翰

志を学ぶもとなへ
風雅乃寿を祈不朽の
為に水墨風
国郡を巡り諸国に
亡人の霊を弔ふ
ものとなれり

詩歌連俳の達人儒仏神の
言葉を徳を仰き貴人を
志ふかく学ぶ人多
貴賤も床上に飾り
志ふかく俳聖芭蕉庵乃
翁世を離れ波津の芦に結臥て

みしらぬ者とも人集りひとつ
屋敷にて酒のみて
此さとの人すきかたに色紙短冊
或ハ画賛或ハ歌のごとくして
歌ひ求る所に文字の
あやをつゝ作る花芳事なる哉

なるもおかしき事なる哉の
箱に罪業もあらん
水上亭の主人桃源子時事を
事とし雷風函底を
ひとしき毎に
みつゝ陸奥にて古池の雪を

たゝしの生涯よりこゝ四十
余年あり五十歳の時に
こゝろ白あり文あり又書
河口見を浄瑠璃坂にて
彼を賢あるこゝろ人も
味ふべきあるべく桃子より

加ゝる毎昭薗の流を汲ひ
石井彫工の手を借りて梓より
ちゝあり芭蕉翁真流集と名
つゝ雪学此の翁の風を探
らんとひゝて白井の花を
おひ文中の實をあらふと

明和元年甲申十月十二日
深川要津禅寺法碑前より
彩筆再拝し畫
雪中菴蓼太

目録

一 短冊 古池 蛙屏風之巻頭 京 増山氏山只
一 同 加藤 東都 松村氏
一 同 花の雲 増山氏山只
一 同 花の雲 東都 伴氏双峩
一 小短冊 京中也 松村氏

一短冊　父母の　松村氏

一画讃　さるもや　同

一横物　菜ばかもや　画略印あり除之　東都　住岡氏

一短冊　焼失　眉さきを　増山氏山只

一同　名月や　松村氏

一色紙　初ちくま　同

一同　住つるぬ　同

一小切　芝の〳〵　住岡氏

一小短冊　焼失　野ぢ色　松村氏

一色紙　いうめしふ　東都　自在庵

一画讃　菜ばかけ　画略印あり除之　東都　何某

一小切　焼失　衣の〳〵　東都　片岡氏花明

翁之像　狩野常信画　東花坊讃　二幅対之内

一大色紙　[illegible]と横よ　東都　廣岡氏宗端

一小切　[illegible]と[illegible]業　東都　宇津野氏蓼把

一画讃　[illegible]と[illegible]業　画略印あり除之　東都　雪中庵

一自画讃　[illegible]と[illegible]業　画略印あり除之　松村氏

一同　きく[illegible]　同　画略印あり除之　駿府　辻氏馬老

一同　[illegible]と[illegible]や　画略印あり除之

一横物　[illegible]と[illegible]　印あり除之　東都　久保田氏栢子

一同　[illegible]や　下総　岩立氏眠江

一同　[illegible]や　印あり除之　駿島田　塚本氏桃舟

一同　田植　同

一文臺裏書　[illegible]　所持之由来文臺圖集より[illegible]　東都　松村氏

一消息　[illegible]　[illegible]　川村氏慎車

一消息　[illegible]　東都　村田氏枝貞

一同　寅年[illegible]　東都　倉林氏以申

一小切　[illegible]　住岡氏

焼失

一同　[illegible]　廣岡氏宗瑞

一消息　[illegible]　東都　溝口氏素丸

一繪色紙　[illegible]　東都　柴田氏鼠腹

仏頂禅師坐右屏風[illegible]

一消息　[illegible]　駿府　小西氏子来

一同　[illegible]　同　比良氏都雁

一同　老の名乃　同　力石氏耳得

一同　幸使啓上　東都　大平氏雁奴

一同　当月十六日　松村氏

高後文略

一同　桃落ハ[illegible]　同

高文略

一消息　玉の貞子仕合とのもの　松村氏
　　苔文略

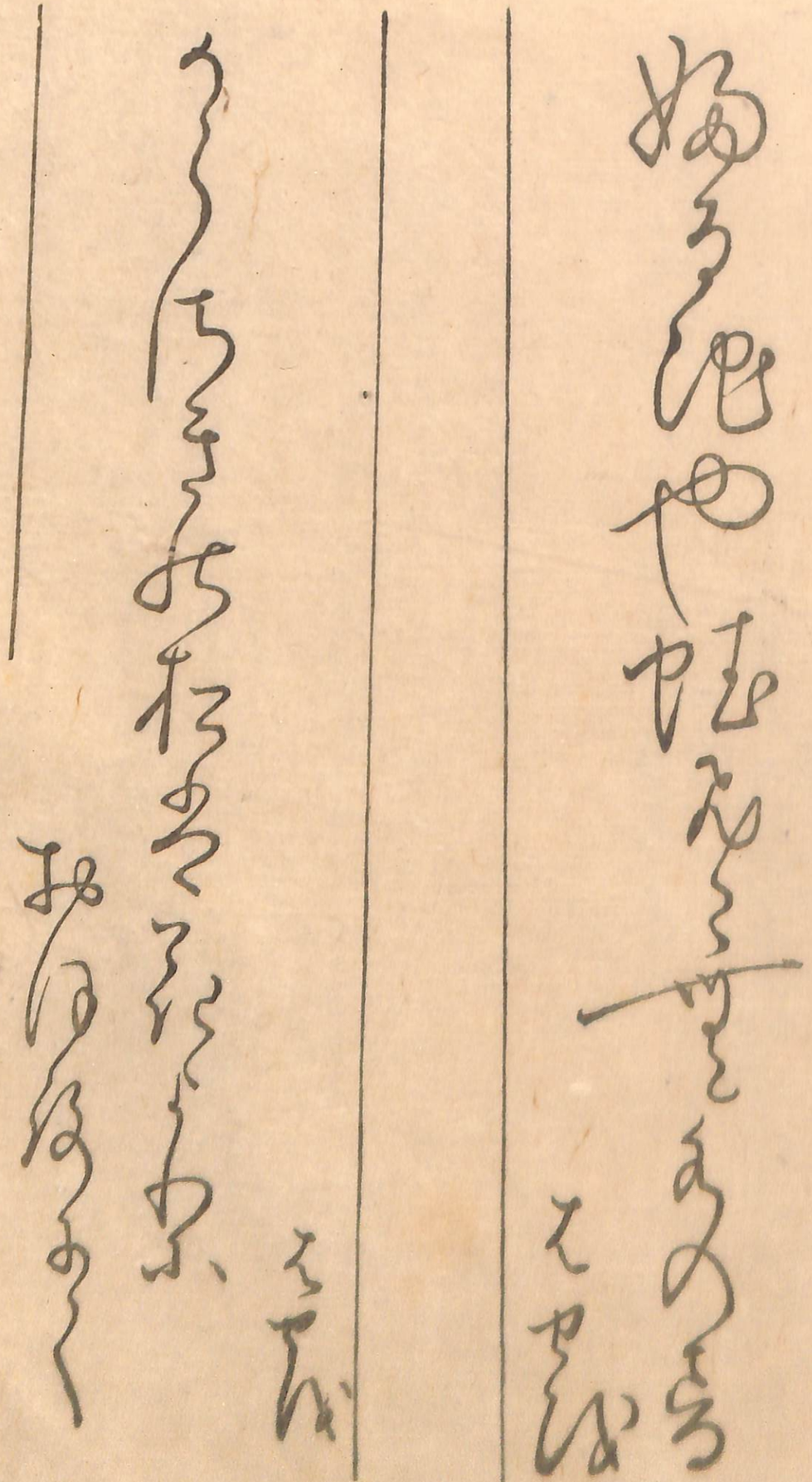
一句メ　東都　牧氏止啓
　　印あり除之

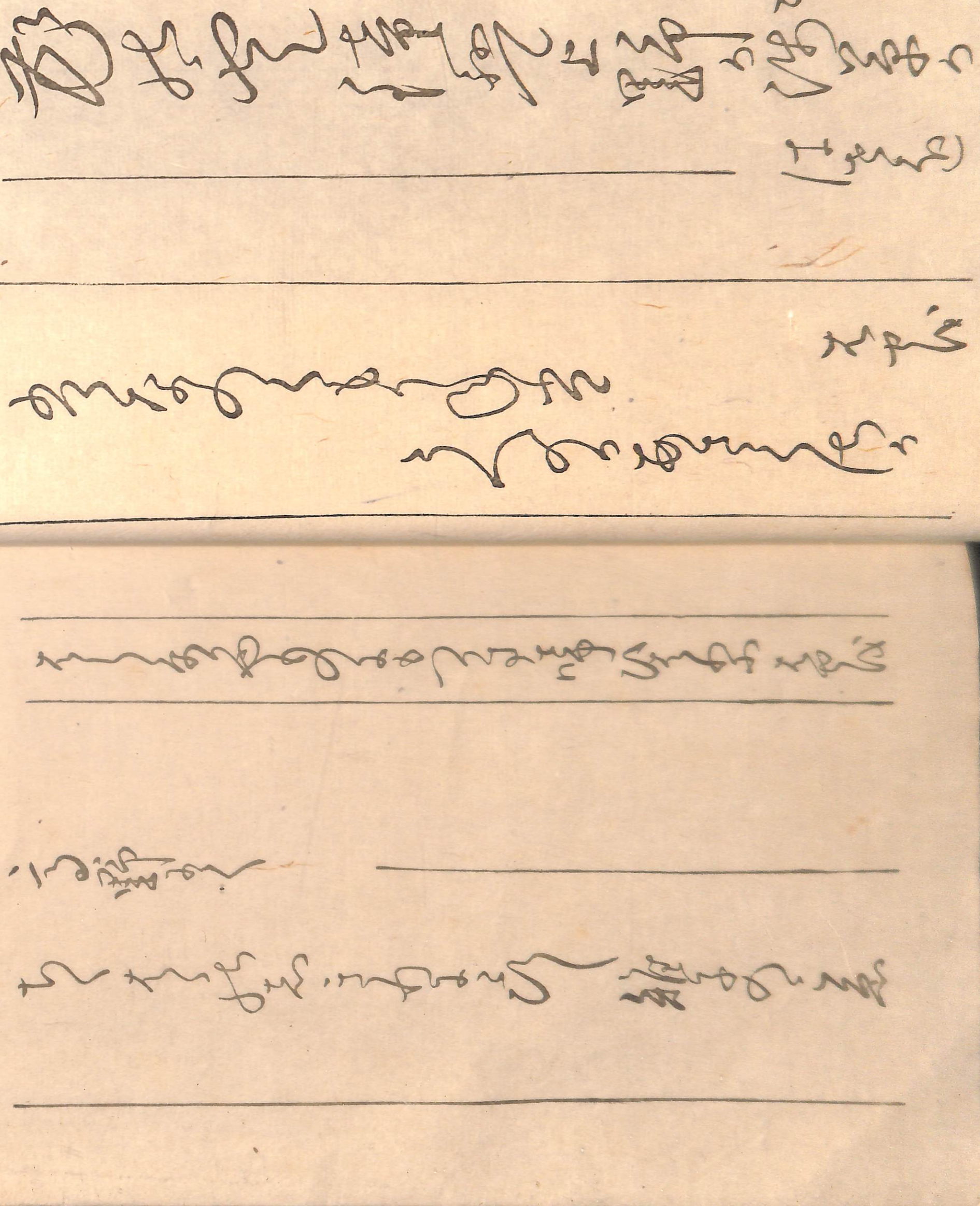
一俳席三ヶ条　大津　浮巣庵文素
　　印あり除之

一一行物　松村氏

一遺状　伊予来京ハ　同
　　印あり除之　難波ニ病床ヨリ門人ニ送之

以上





بسم الله الرحمن الرحيم

الحمد لله رب العالمين

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書付をつる

[illegible]

蘭の香や

[illegible]の姉よきを扱を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

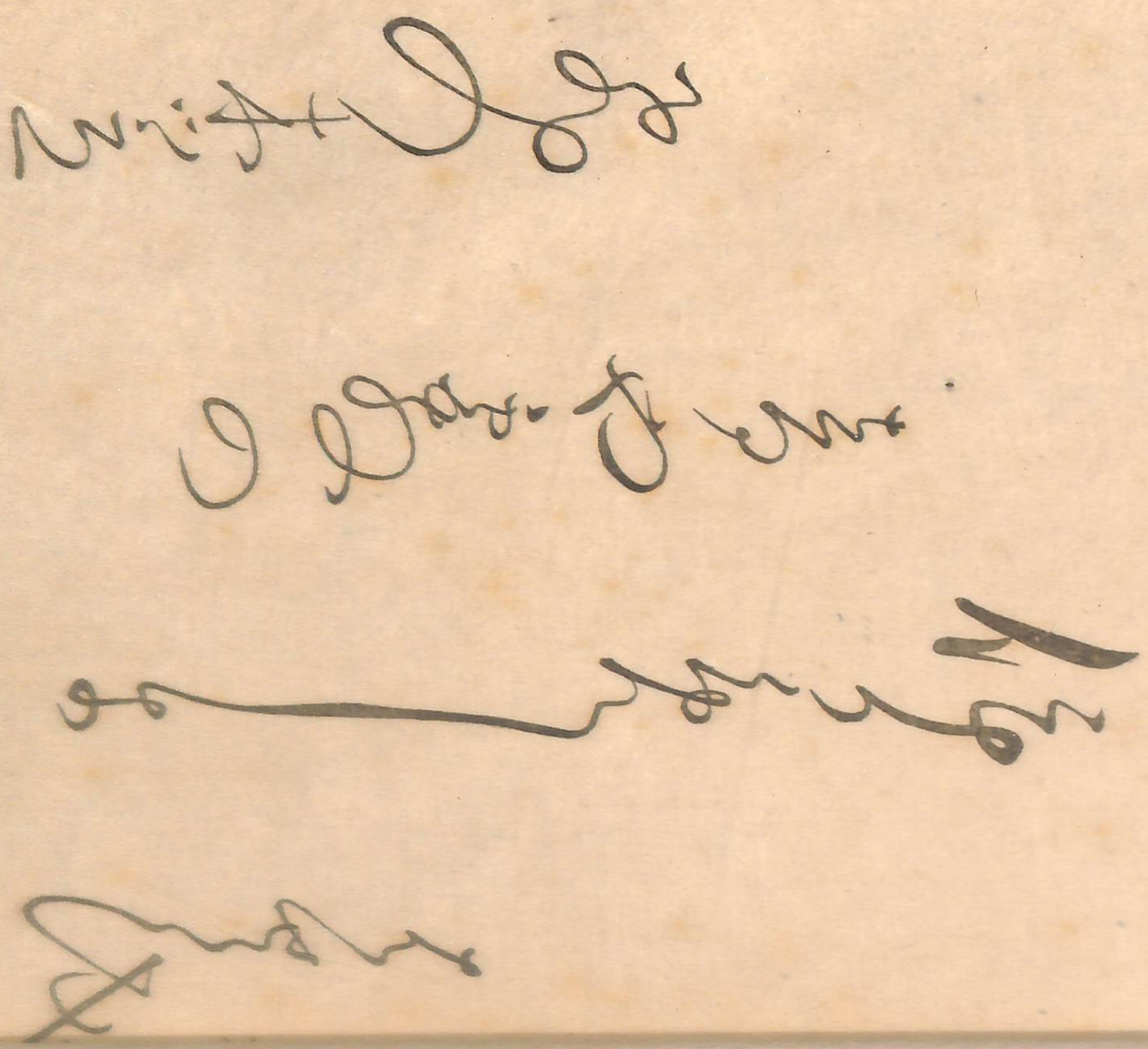
[illegible]

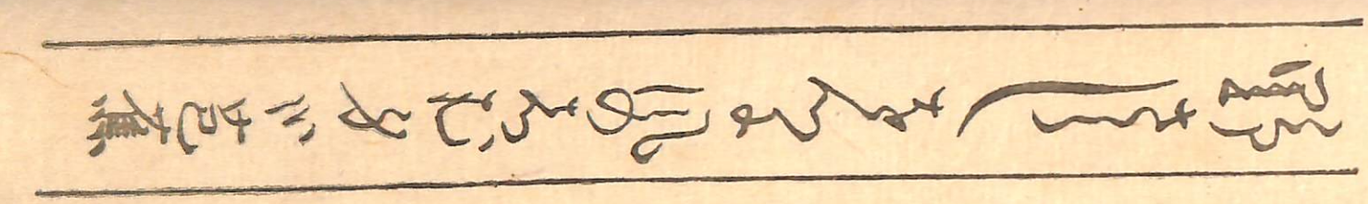
[illegible]

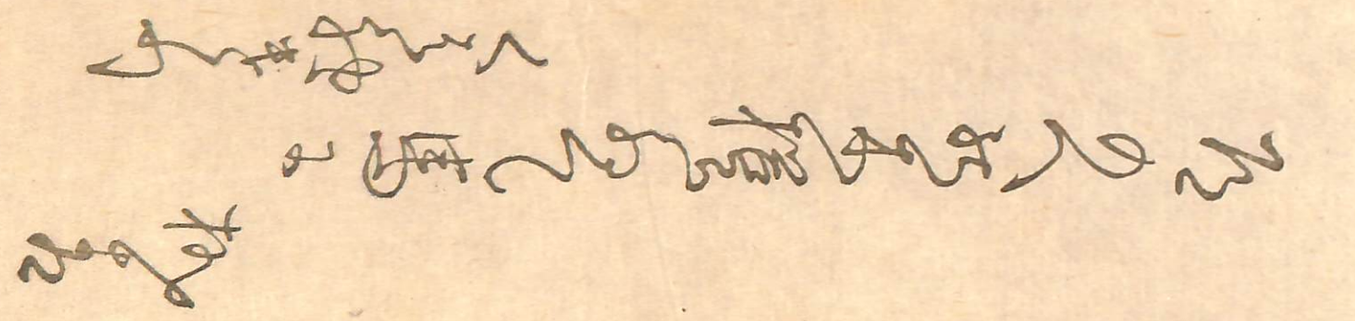
[illegible]

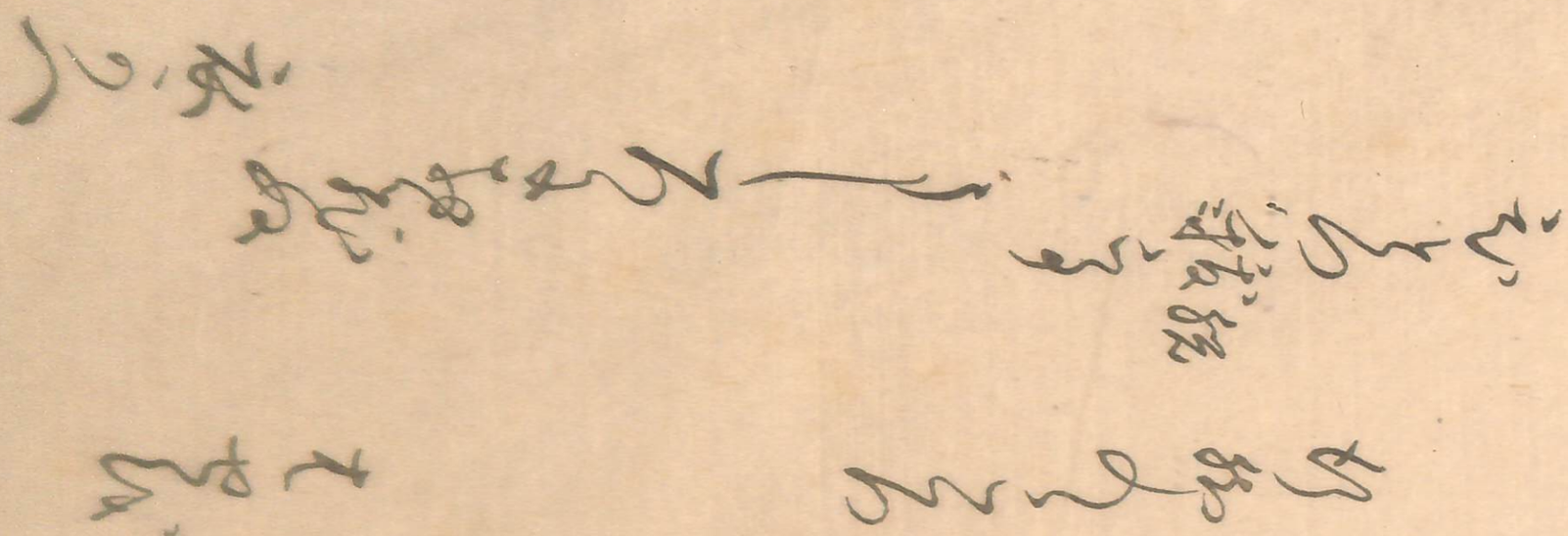
[illegible]

[illegible]





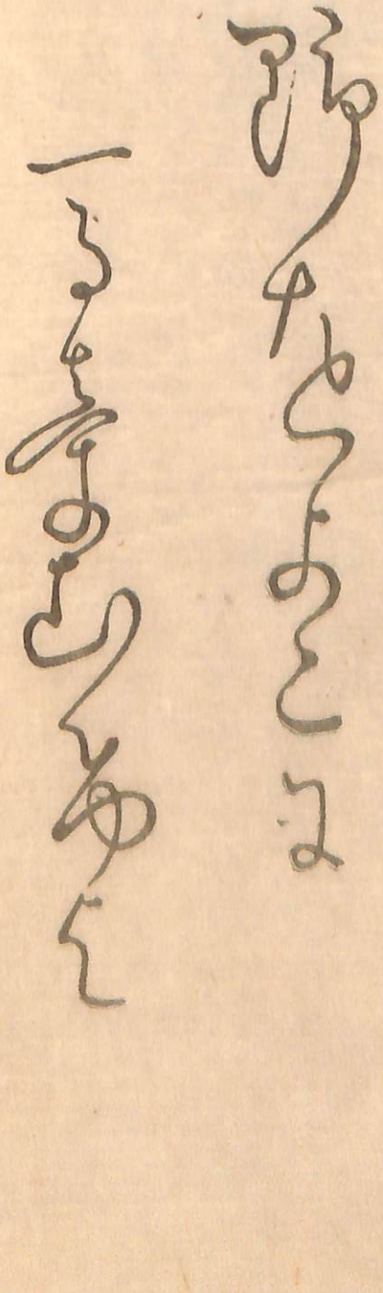




芭蕉翁眞跡集

樋口功校訂

大阪　天青堂



芭蕉翁眞跡集序

蒼頡書を作て天粟をふらす。されぱもろこしの王羲之王献之此國の尊圓尊朝親王を始奉り、其道にふける輩は、夜學の窓に氷を煑て墨摺、しら雪に筆をたつる、むべなるかな。硯の壽も終に盡て不朽のためしならずさいへぢも、水莖の岡の眞砂路には鳥の跡たにず。亡人のかたみ是にまされるものなしとぞ。そもいにしへより、詩歌連俳の達者、儒佛神の高學をも、其德を仰ぎ其人をしたふには、多く筆の跡を尊み貴家にも床上の飾ものとしたまふ。爰に俳聖芭蕉庵の翁、世を難波津の芦に枯臥てみじかき夢を見果給ひてより星霜いまだ百の數ならねぢ、此道のすきものどもは、色紙短册或は畫賛或は文のはし〳〵まで競ひ求て家珍とす。故に文字のあやしう假名の覺束なきたぐひもおこなはれて、千載の翁に罪蒙らするも少からず。

水上亭の主人桃鏡子此事を年頃うらみ、我家の函底をはらひ、遠きは文にをうけ、近きはみづから臨摸して、古池の吟をはじめ遺書にいたるまで四十餘章、おほむね年齢の時をはかり、句あり文あり、又書畫あり。是を淨破理の鏡とせば、彼眞贋あきらかならん。予も此なけきあさからねば、桃子にかはりて母昭齋が跡をしたひ、石井彫工が手を借りて梓にちりばめ、芭蕉翁眞跡集と名づく。嗚呼此翁の風騰を探らん人は、ひらひて句中の花をおもひ、文中の實をおもふべしと、

明和元年甲申十月十二日、

深川要津禪寺の碑前に
頓首再拜して書。

雪中庵蓼太

雪中庵 玄峯

目錄

一短冊古池蛙屏風之卷頭　京　增山氏山只
一同から崎花の雲　東都　松村氏
一同　增山氏山只
一同花の雲　東都　伴氏双裝
一小短冊原中や　松村氏
一短冊父母の　松村氏
一畫賛はるもやゝ　同
畫略、印あり除し之
一横物燒失菊の香や　東都　住岡氏
一短冊眉はきを　增山氏山只
一同名月や　松村氏
一色紙初しくれ　同
一同住つかぬ　同
一小切燒失道のへ　住岡氏
一小短冊野さらし　松村氏
一色紙いかめしき　東都　自在庵
一畫讃燒失栞はたけ　東都　何某
畫略、印あり除し之
一小切衣かへ　東都　片岡氏花明
翁之像狩野常信畫　東花坊讃二幅對之內
一大色紙野を横に　東都　廣岡氏宗瑞
一小切くすの葉　東都　宇津野氏蓼把
一畫讃くすの葉　東都　雪中庵
畫略、印あり除し之、右ニヤ古雪中庵より傳ふ
一自畫讃くすの葉　松村氏
畫略、印あり除し之
一同　同
きく鷄頭　畫略、印あり除し之
一同　駿府　辻氏馬老
夜すからや　畫略、印あり除し之
一横物夏はあれこ　東都　久保田氏栢子
印あり除し之

一同笠島や　印あり除し之　下總　岩立氏眠江
一同するか路や　駿島田　塚本氏桃舟
一同田植　同
一文臺裏書ふたみ　東都　松村氏
所持之由來文臺圖集にくはしくしるす
一消息昨日は御見舞　東都　川村氏愼車
一消息今日長次郎殿　東都　村田氏拔貢
一同實壽院ご申僧　東都　倉林氏以申
一小切燒失ほゝゝきすむつきは　住岡氏
かまくらは
一同　廣岡氏宗瑞
一消息乙洲くたり候間　東都　濱口氏素丸
一繪色紙をのかねの古歌　東都　柴田氏鼠麻
佛頂禪師摩石の屏風におす所
一消息夏より七月まで　駿府　小西氏子來
一同此中は御待　同　比良氏都雁
一同老の名の　同　力石氏耳徘
一同幸便啓上　東都　大平氏雁奴
一同當月十六日　松村氏
前後文畧
一同桃隣いかゞ　同
前文略
一消息壽貞無二仕合一もの　松村氏
前文畧
一句〃　東都　牧氏止啓
印あり除し之
一俳席三ケ條　大津　浮巢庵文蕉
印あり除し之
一一行物　松村氏
一遺狀伊兵衛に申候　同
印あり除し之　鵜波の病床より門人等送し之
以上

ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを
からさきの松は花よりおぼろにて　はせを
花の雪鐘は上野か淺草か　はせを
はなのくもかねはうへのかあさくさか　はせを
はらなかやものにもつかず啼ひばり　はせを
高野にて
ち・はゝのし參りにこひし煙子のこゑ
はるもや・けし參さゝのふ月ゞ梅　はせを
てふさ云ける女あが名に
發句せよさ云て自參

いふ人のもとにありて、

ちさはまだ青ばながらになすび汁
さみだれの雲吹おとせ大井川

やはらかにたけよことしの手作麥　如舟

田植とゝもにたびの朝起　はせを

元禄七、五月雨に
降こめられてあるじの
もてなしに心うごきて、
聊筆とる事になん

ふたみ

うたがふなうしほの花も浦のはる

元禄二仲春　芭蕉

杉風様　はせを

二月七日

昨日は御見舞被成候て、
御痛の事共直々に
御物語承、先案堵
致候。
一此書狀加州金澤へ
不叶用事申遣し候。

何とぞ被入御念上包
貴様御名を御書被成候て、
御懇意の方へ御頼
被遣、返事参候様に奉頼候。
御家中の風俗扇狀
不屆候よし、兼て承
候間、貴様上包に被成候て、
成程慥に奉頼候。少々
急候間、能様に被仰遣可被下候。
發句も延引可致
とて存候へ共、與風所望に
逢候て、如此申候。
笠も餅に貰する餘の先
日比工夫の處にて御座候。
（功名、然て、餅而トモ候間トモ渡ヲル趣ヲ以上句ニ之）
今日長次郎さの京へ
被参候に付、ちよと
計申入候。其後は
御疎々敷存候。彌
無故障被入候様と、
抑斗存候。然身も
無事に暮し候。さては

かまくらは活て出けむはつがつほ　はせを

乙洲下り候て一輪致問トモ啓進候。愈御無事に御勤仕り候哉、久々絶便候て御物遠罷過候。拙者持病がちにて暮候へ共、露命は猶難面候て、可易御心候。俳諧いかゞ被成候哉、定て去来折〳〵御尋候半と存候。少々歌仙にても御見せ可被成候。

をのか音につらき別のありさだに
しらでやひとりとりの泣らん

尚々四五日中に又々委可申遣候。先大阪へ出候を御しらせの爲

夏〻七月迄の御狀

早々申頃候

尤遲速御座候へ共、段々無相違相達候。久々伊賀に逗留故、便りも不致候。無心元被存候。愈御無事に御勤、御家内相替事無御座候哉、承度存候。おしめ祝言當月中にて可有御座と推量申候。定て御取込可被成候。定て首尾能相調可申と御左右待入候。拙者先は無事に長の夏を暮し、漸々秋立候て、頃日夜寒の比に移候。いかにも秋冬の間御逗暮し可申樣に幾候間、少も御氣遣被成まじく候。追付參宮心がけ候故、先大阪へ行け可出申、去る八日に伊賀を出候て、兼帰の日南都を立、則其暮

大阪に至候て、酒堂方に旅宿、假に足をとゞめ候。名月は伊賀にて見申候。發句は重て可懸御目候。

菊の香やならには　古き佛達
菊の香やならは幾代の　男ぶり
びいゝと啼尻聲　悲し夜の鹿

いまだ句躰難定候。追付他見被成まじく候。追付爰元逗留の句共可懸御目候。早々御狀御こし可被成候。其元兩替丁か、するが丁酒店にて稲寺や十兵へゝ申もの、爰元伊丹屋長兵へ店にて候て、早々御左右承度候。子珊秋の集被催候や、左候はゞ爰元の俳諧一卷下し可申候。上方筋別座敷炭俵にて色めきわたり候。兩集共手柄を見せ候。少は桃隣にも師恩貴きすべをわきまへ候へゝ御申成候べく候。桃隣俳諧俄に替上候ゝ專沙汰にて候。急便早々カ　以上カ

にて。

九月十日　はせを□
杉風様

此中は御待被下候處、近在へ參候て、御めにかゝらず、殘念不少候。さては貴様にも近々田舍へ御下向の由、段々寒氣に趣候て、御苦身千万に存候。隨分御達者に頓ての御上京まちまゐらせ候。

然ば發句の事御申置候。彼方へ御見やけに成候樣のよろしき句も無之候へ共、御申置故此句申進候。

馬方はしらじ時雨の　大井川

如此御座候。いかゞ候哉猶あゝ追可申承候。

かしく

十廿二日　はせを
洞水丈

保生佐太夫三吟に老の名の有共しらで四十から

少將の尼の歌の餘情に候。

素堂菊園に遊びて菊の香や庭にきれたる沓の底

野馬ゝ云もの四吟に金屏の松の古さよ冬籠り猶廣く他見被成まじく候。追て俳諧ゝ可懸御目候。乍去當冬は相手に可爲物無御座候へば、俳諧も成申まじく候。廣き江戸に相手のなきも氣の毒に存候。當方無恙、五句付點取脾の臓を捫躰に候。此脾の臓捫破たらん後、初て俳諧はやり可申候。いづ方へも久々絶書信菩膳へ連狀一通此狀のみにて、大がき大阪へもいまだ初夏ゟ返翰不致候。落字女章の前後はゆづり候て、御推覽可被下候。當年めきゝ草臥增り候。

上方邊繪色紙いまだ調不申候由、重て可申遣候。將又此度石摺大色紙四枚被懸御意、辱、折ふし屏風入用にて別てよろこび申候。五老井のあつきも日やけに（二小夏）あひ可申候。煎茶可被下由、遲くてもくるしからず候。能便宜少々可懸御意候。頃日あべ茶

にも給あき申候。以上

十月九日　はせを

許六雅丈

幸便啓上、いかゞ被成候哉ゝ御懐敷而已に候。御老母様御内御子達御息災に御入被成候哉、承度奉存候。拙者舊冬甚寒殊の外痛候へ共頃日は又々常の通に居申候間、定て當年中には懸御目候て可有御座候。何ゝぞ〳〵御堅固成様に被成、今一度再會御待可被下候。拙者も隨分保養致候て、懸御目度存候。

加右衛門殿無恙御勤被成候哉北鯤子御兄弟無事に候哉、承度存候。定世事御くるしみ可被成ゝ是又心をいたましめ候。御心得成可被下候。

一膳所御親類中へも被仰遣候由、御知人に御成可被成よし、被入念候へ共、去秋の比ゝ膳所へもしかゞ不参、大津京邊に遊び居申候故、いまだ不得御意尤爲指用事も無御座候故、其通に致候。若御袋様なゞへの咄にも成可申候はゞ、重て御めにかゝり下り可申候。

以上。

二月十三日　芭蕉

嵐蘭雅丈

一當月十六日加茂へ參平兵へに一宿、御袋様源兵へ殿あねごなゞへ逢申、御袋御無事に御入候。されば共四年以前ゝはよほどゝしも御寄、耳も遠く被成候。あねごゝふたり貴様

事のみくゞくかへす〳〵逢申度よし被申、難儀いたし候。則平兵へ源兵へ殿書狀相屆候。委く跡ゝ可申進候。

十六日好齋老ゝならちやにて御出合候由、御なつかしく候。好齋老へも此たび狀數多く候て延引、重て可申達候。御心得被成可被下候。深川の様子具に重て御申こし可被下候。

一二郎兵衛道中達者にて拙者苦勞にもなり不申、能つゝめ申候。

以上。

壬五月廿一日　はせを

猪兵衛様

一桃隣いかゝ相被勤候や、暑氣の節短夜ゝ云、會も心のまゝには成申まじく候。杉風子珊心にたがはざる様に、實を御つゝめ候へゝ御申可被成候。京都俳諧師五句付候事に付閉門俳諧ざた、ひつしりゝ蛭に鹽かけたる様に候。然に段々拙者口から申上せ候も氣の毒故不具候。ケ様の處唯實を不勤故ゝ合點を致、むざゝしたる出合會等心持可有旨、桃隣へ御物がたり可被成候。

一市之進殿御無事に候哉、可然御意得賴度候。

一此方京大阪貧乏弟子もかけあつまり、日々宿を喰つぶし、

大笑ひ致くらし申候。
一理兵衛細工無之時分、せめて煩不申様に御氣を可被付候。右の通壽貞にも御申きかせ可被下候。おふう夏かけて無事に候哉、様子具に御申越可被成候。
一宗波老庄兵へ殿へも御心得可被成候。定て好齋老たへず御見舞可被下ミ存事に候。追て以書狀可得御意候。以上

六月三日　桃青

猪兵へ様

壽貞無仕合もの、まさおふう同じく不仕合、ミかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へ共、急便に候間、此書狀一所に御覽被下候様に賴存候。萬事御肝煎御精御出しの段々、先書にも申來、扨々辱、誠のふしぎの緣に候。此御人賴置候も、ケ様に可有端ミ被存候。何事も〳〵夢まほろしの世界、一言理くつは無之候。ミもかくも能様に御はからひ可被成候。理兵衛もうろたへ可申候て、ミくミ氣をしづめさせ、取亂し不申様に御しめし可被成候。以上。

六月八日　桃青□

猪兵衛様

僻墨十四

内長一
丸貳

芭蕉桃青

一諸禮停止
一出合遠近
　但聲先
一一句一直
　雪月華一句

右三ケ條
舊式也
芭蕉庵桃青書之

守口如瓶　防心如城

芭蕉翁書

一伊兵衛に申候。當年は壽貞事に付色〳〵御骨折、面談に御禮ミ存候所、無是非事に候。殘りし二人の者共十方を失ひ、うろたへ可申候。好齋老なぞ御相談被成、可然了簡可有候。
一好齋老よろづ御懇切、生前死後難忘候。
一桑順尼禪可坊情ふかき御人也。
面上に御禮不申、殘念の事に存候。
一貴様病起御養生隨分御勉可有候。
一桃隣へ申候再會不叶可被力落候彌杉風子珊八草子よろづ御投かけ、兎も角も一日暮ミ可存候。

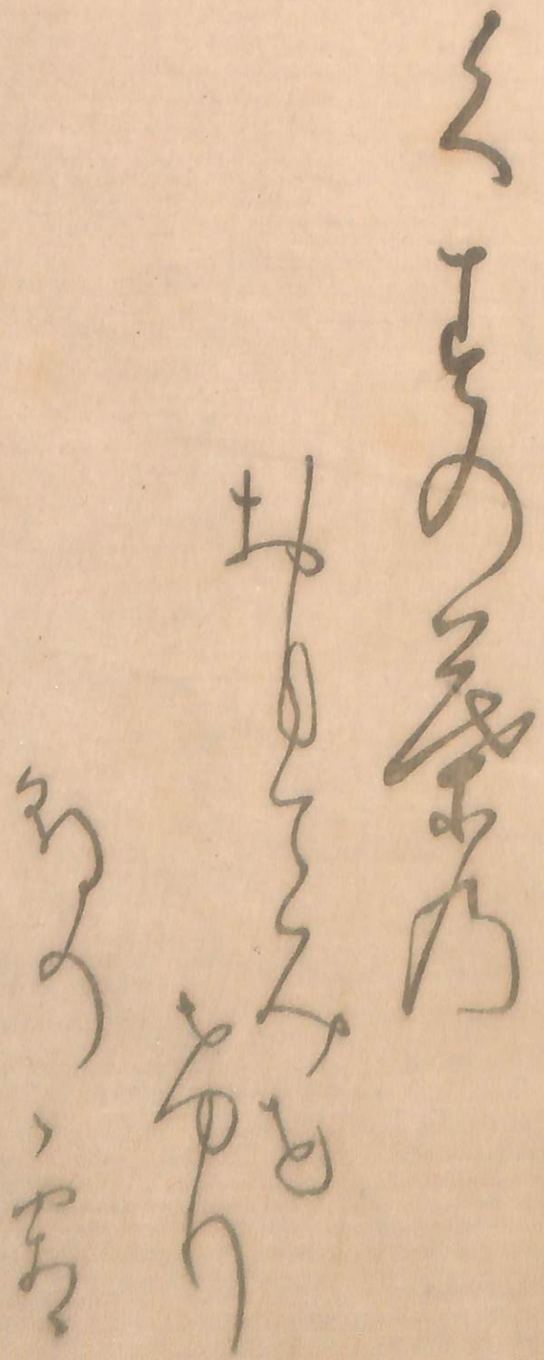
元祿七年十月

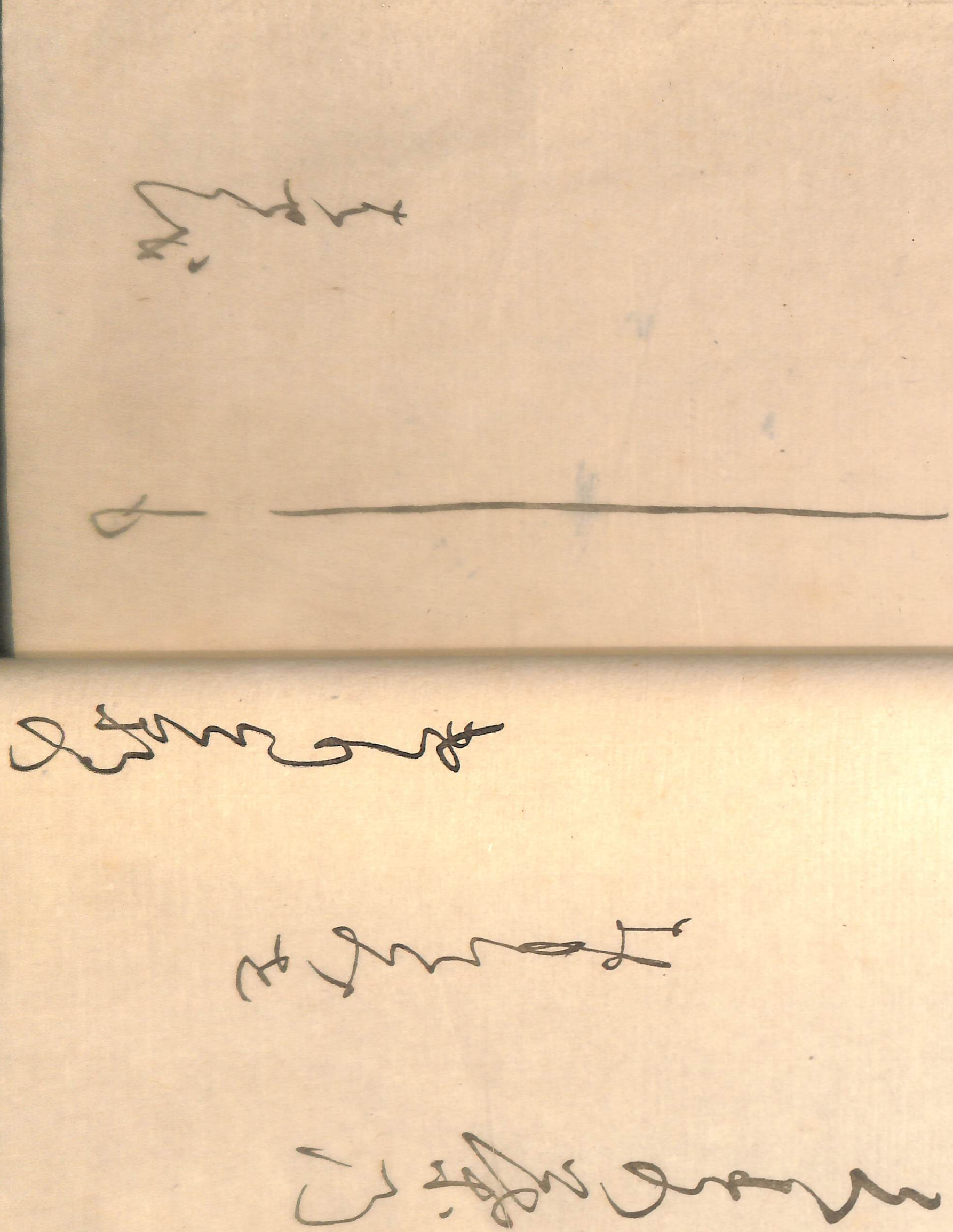
支考此度前働驚深切實を被盡候。此段賴存候。庵の佛は則出家の事に候間遣し候。

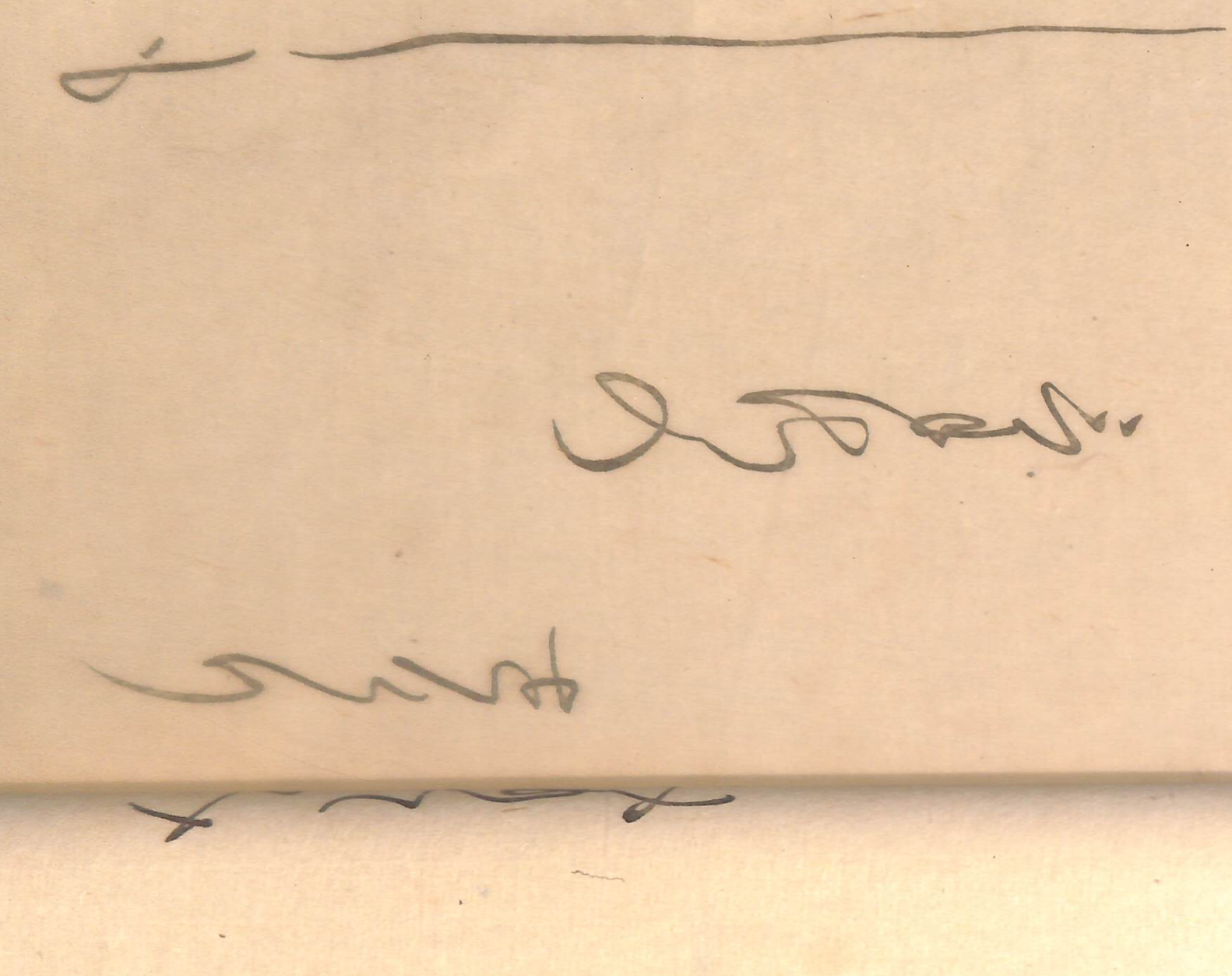
はせを

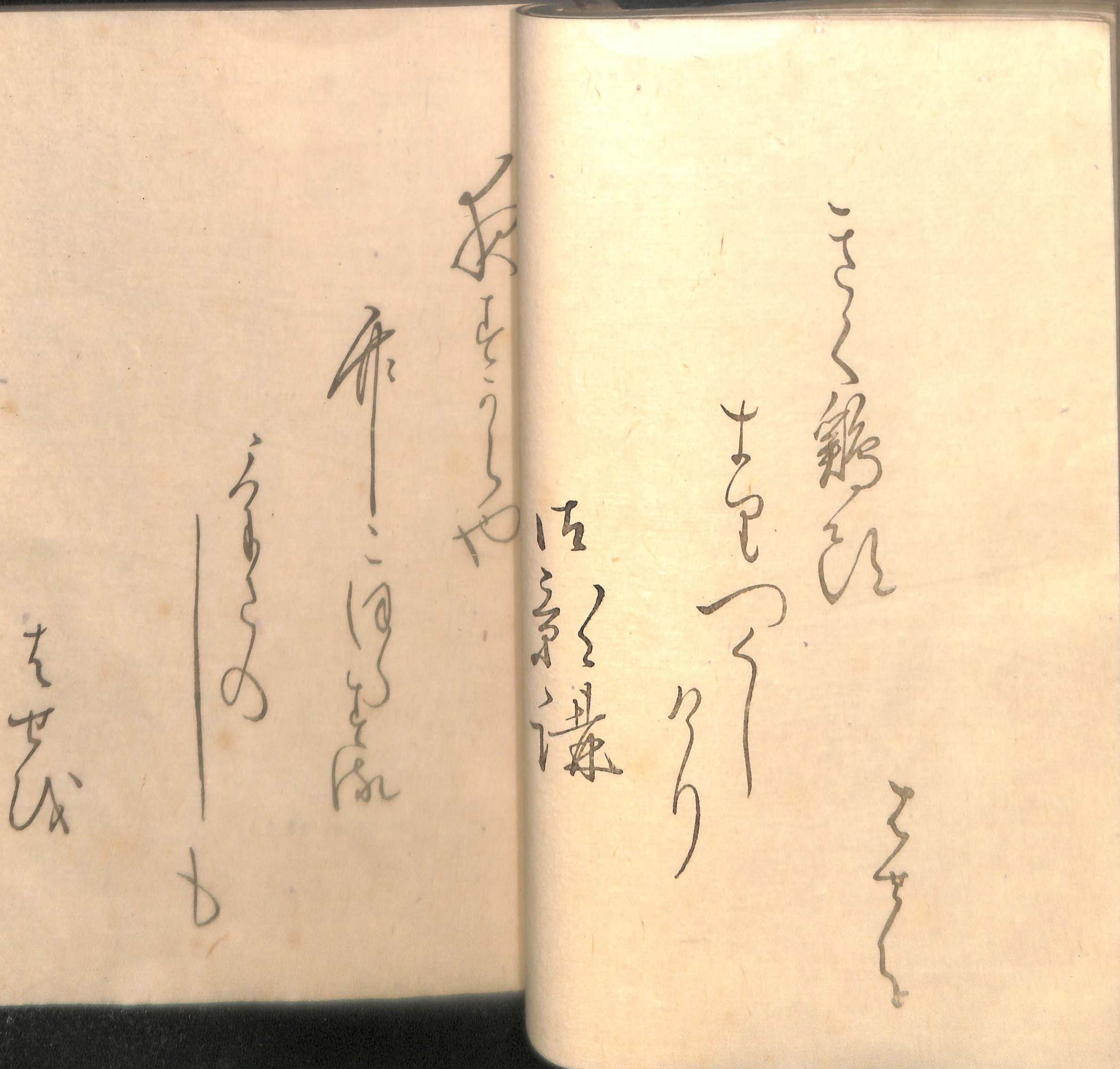
滑稽集一葉集等を參酌して之を校し
且試に句讀を施せり

樋口功









卯月の中比須磨の浦
一見すうしろの山は青葉に
うるはしく月はいまだ
おぼろにてはるのみじか夜も
あはれなから只此浦の
まことは秋をむねとするにや

みや[illegible]ものゝくさしあたり[illegible]
あはれさ
[illegible]

夜を[illegible]れば
[illegible]
須磨の月

すゝきのほに入く
すゝきや
えだもそよがぬちやの
まとひ
きやくと
文月の露もこぼれて
おちくるおもひをあらはしぬり
きれたこまかにさゝら
ぬく如舟ゆく船なれと
いふ人のりもにありて
ちさわかまさまえんなかりに
かすひけ
さゝられしの音ゆくおともあさ井川

やうた

めあて

さとびとのあこがれ

四拍子へもの

あこがれ

元禄七年月

ごろ刊行されてあるもの

をもふことを

御参考ともなら

物ごとに

うたがふ

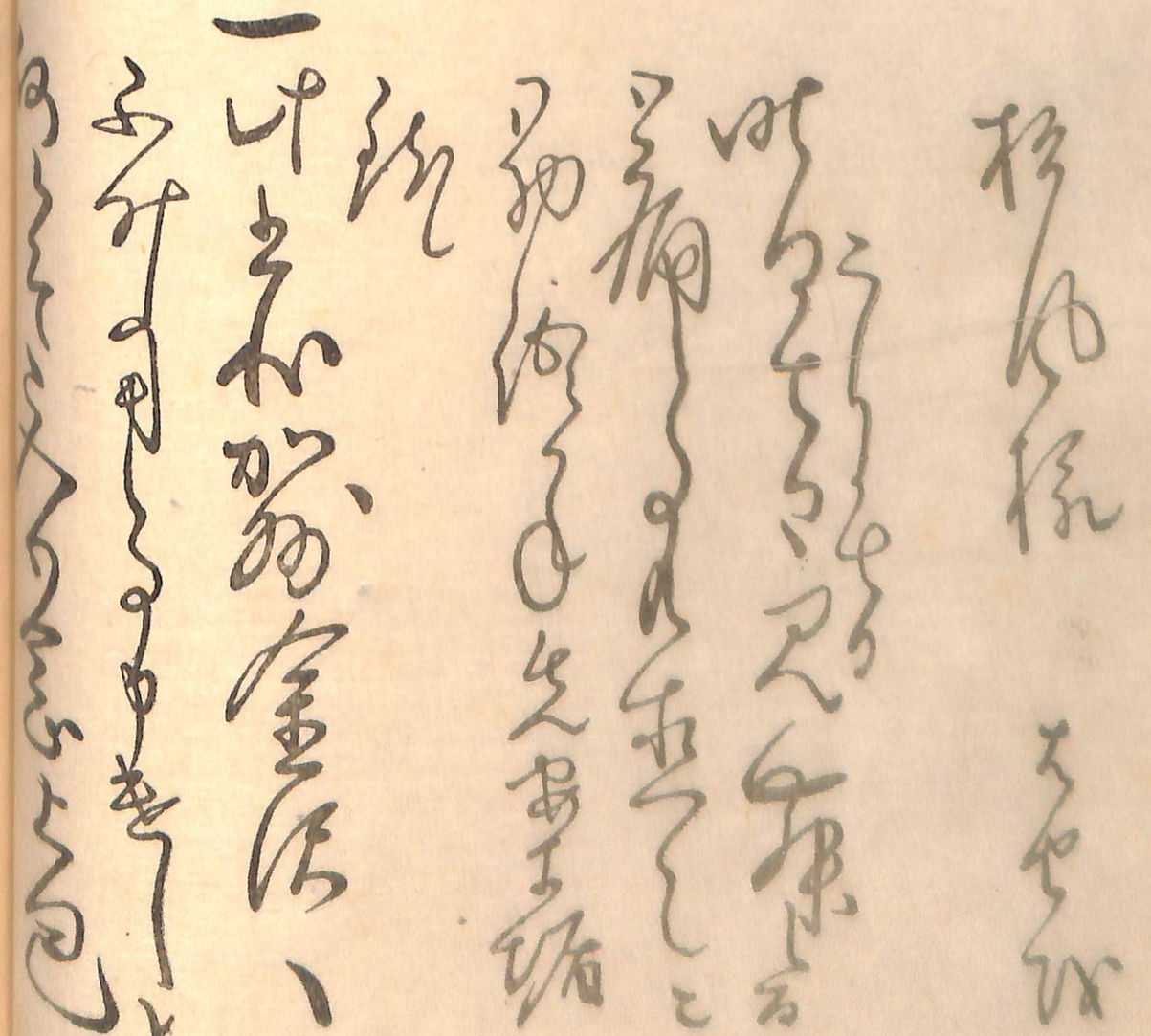
宇宙

なの

花も

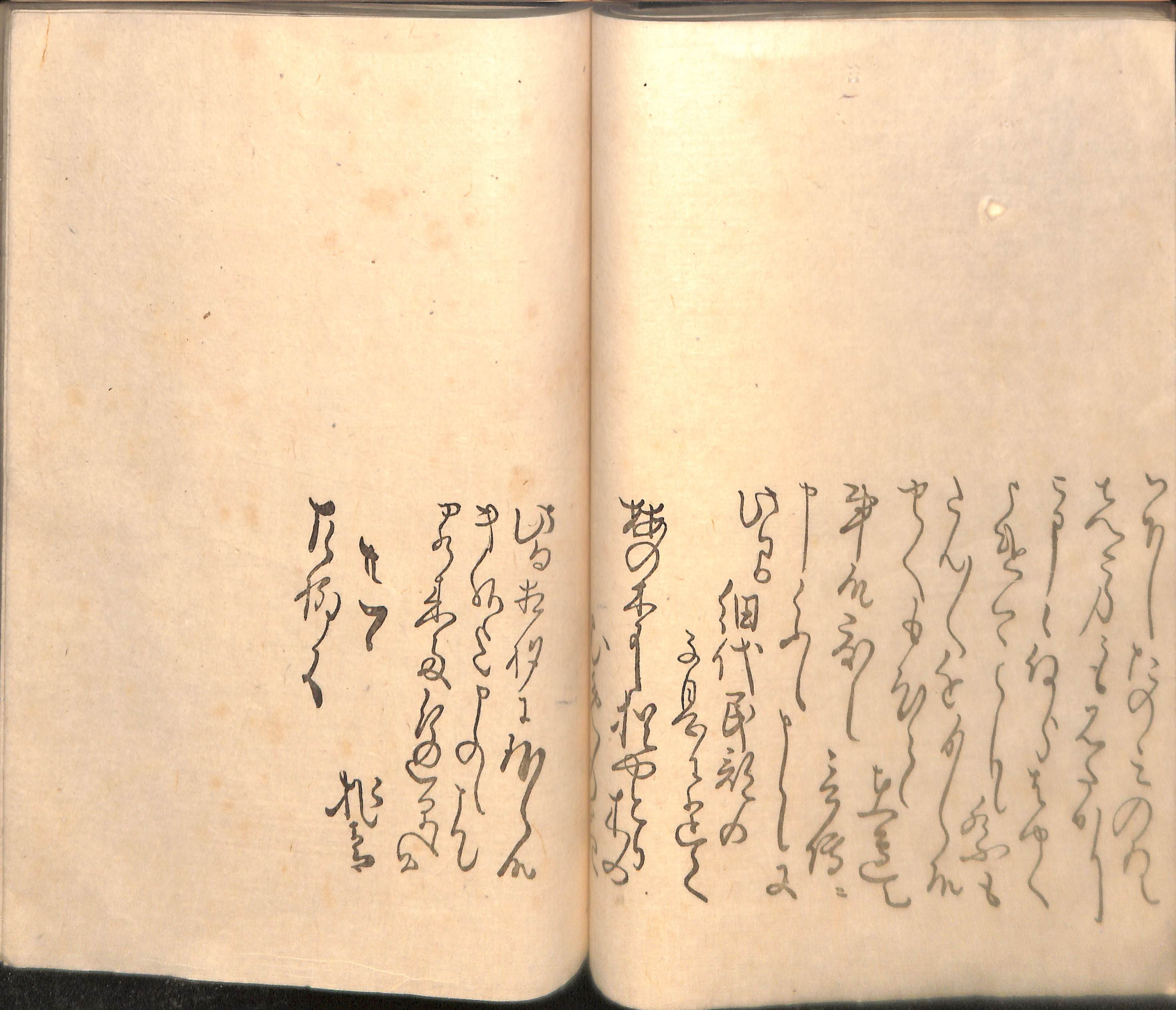
浦のさま

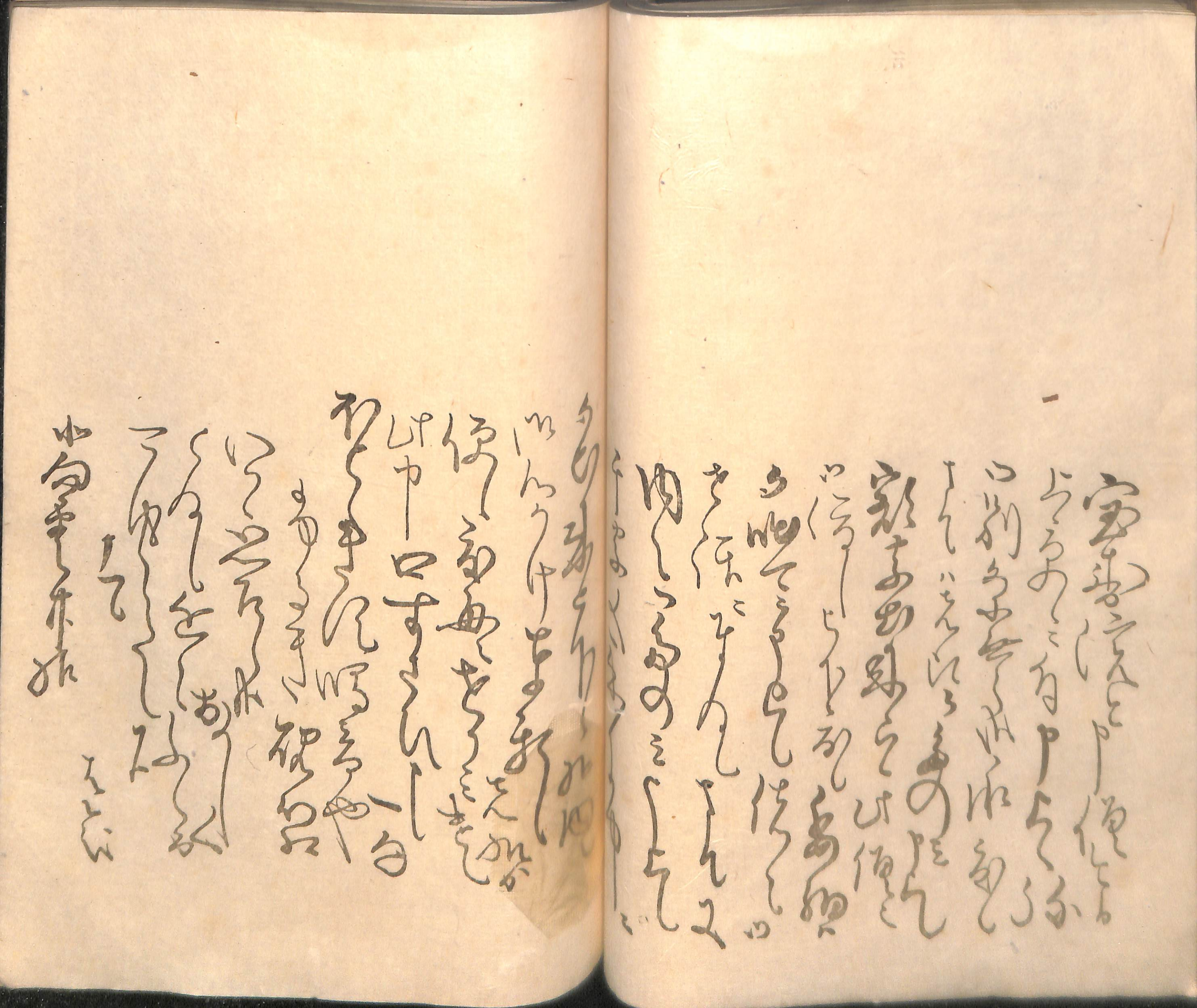
元禄二仲春　芭蕉

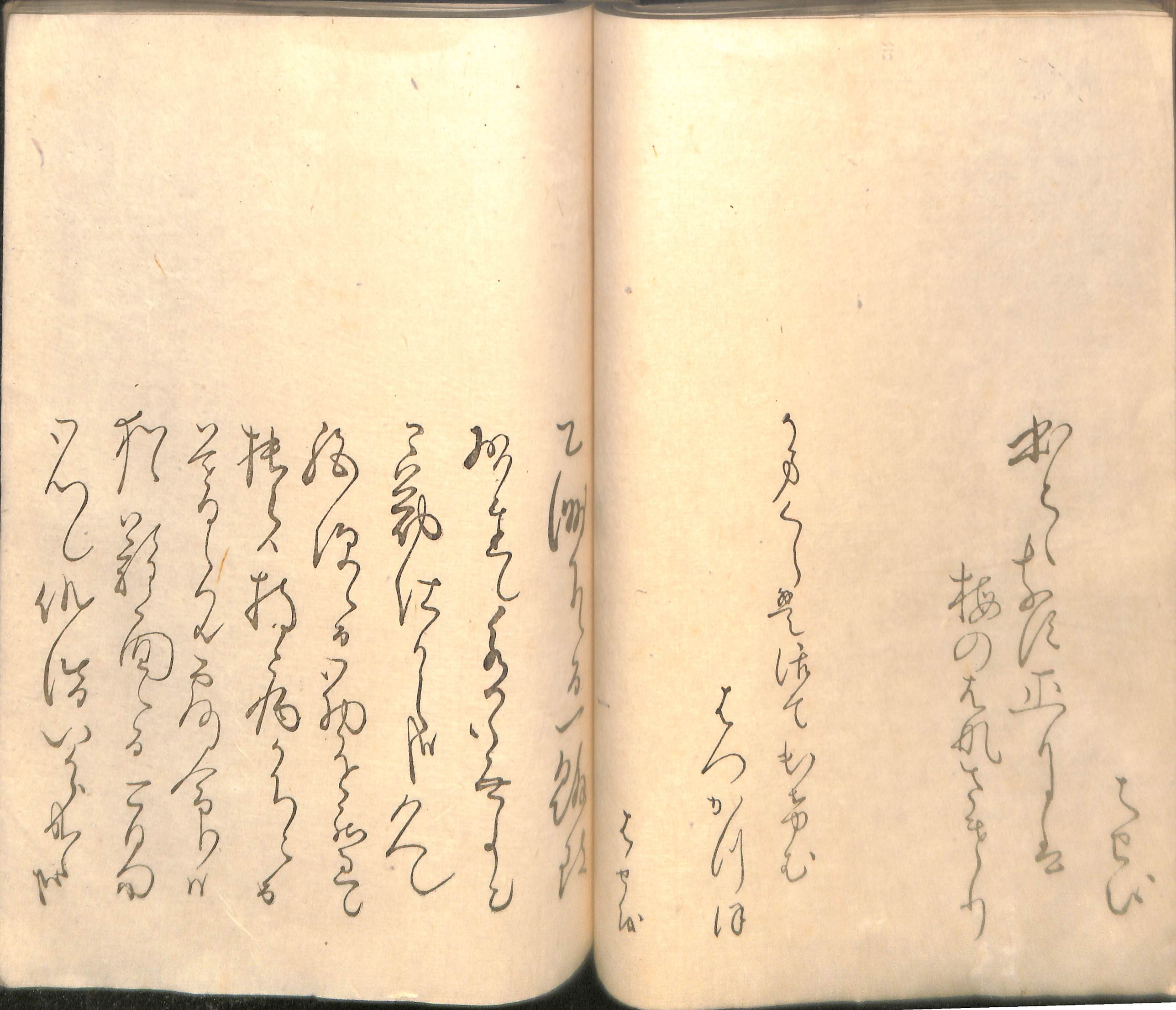


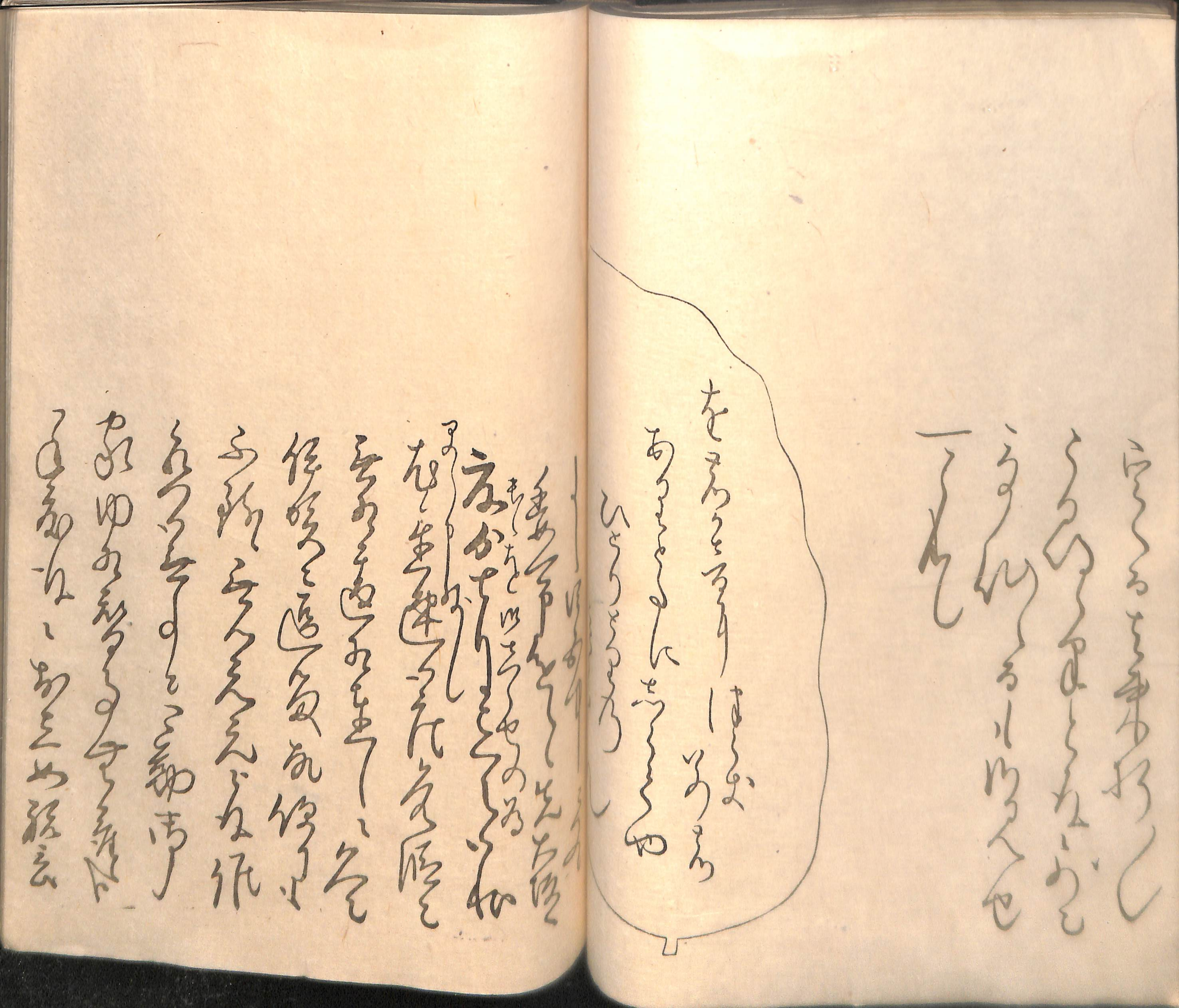
ぬれともよりそは
とけんちからに
まてるなし
茶や餅子菓子ふれ
弱のらん
りはふまてもおさまる

ともにわりとめまて
らふしからまと
にゆのしにはく
ゑきてよらてね
にかゆきらかはと
ねしのよらるとくらて
まりてなるしさん
ゆしら我しなれ
りやはなれにまて
しのとのしなへ







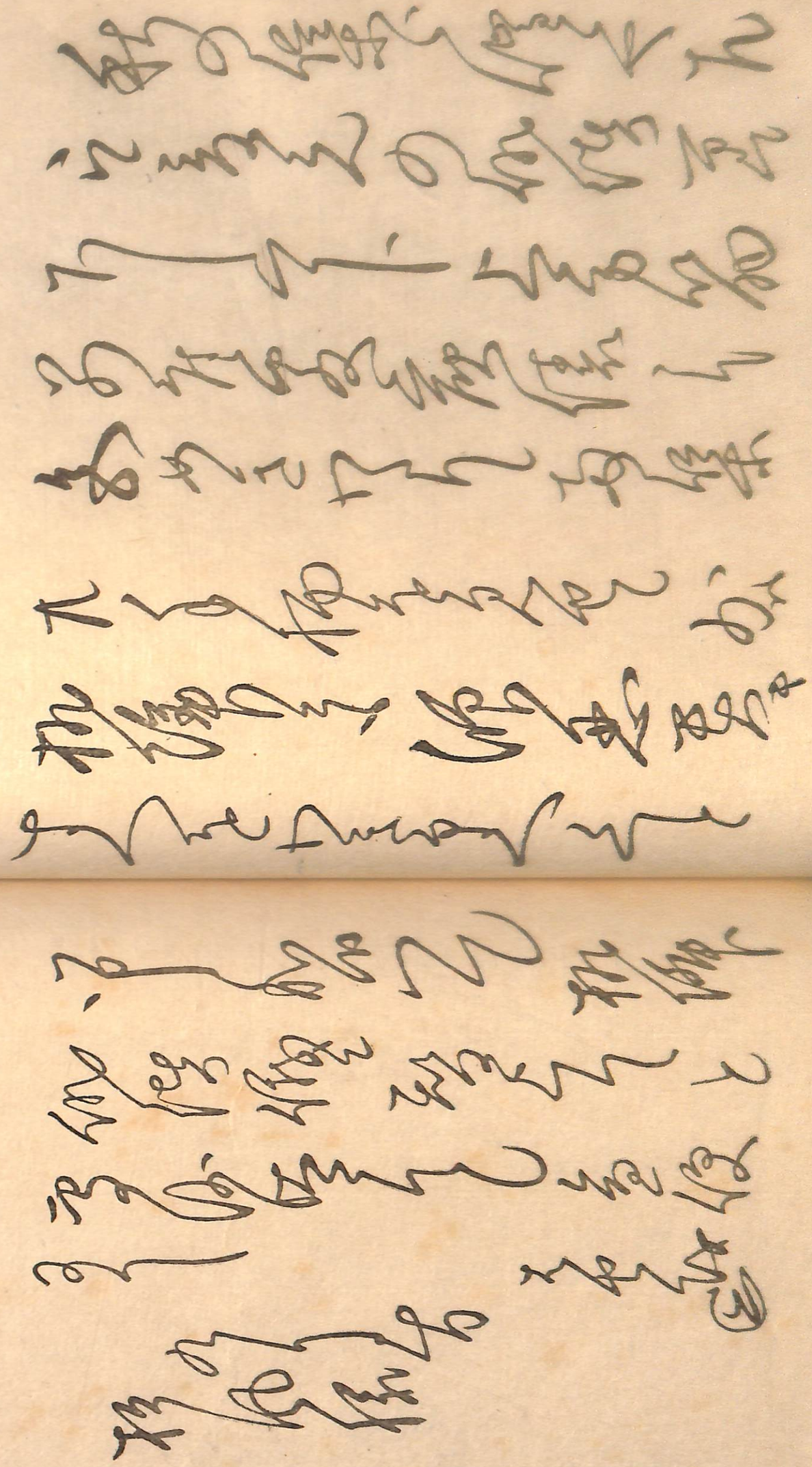


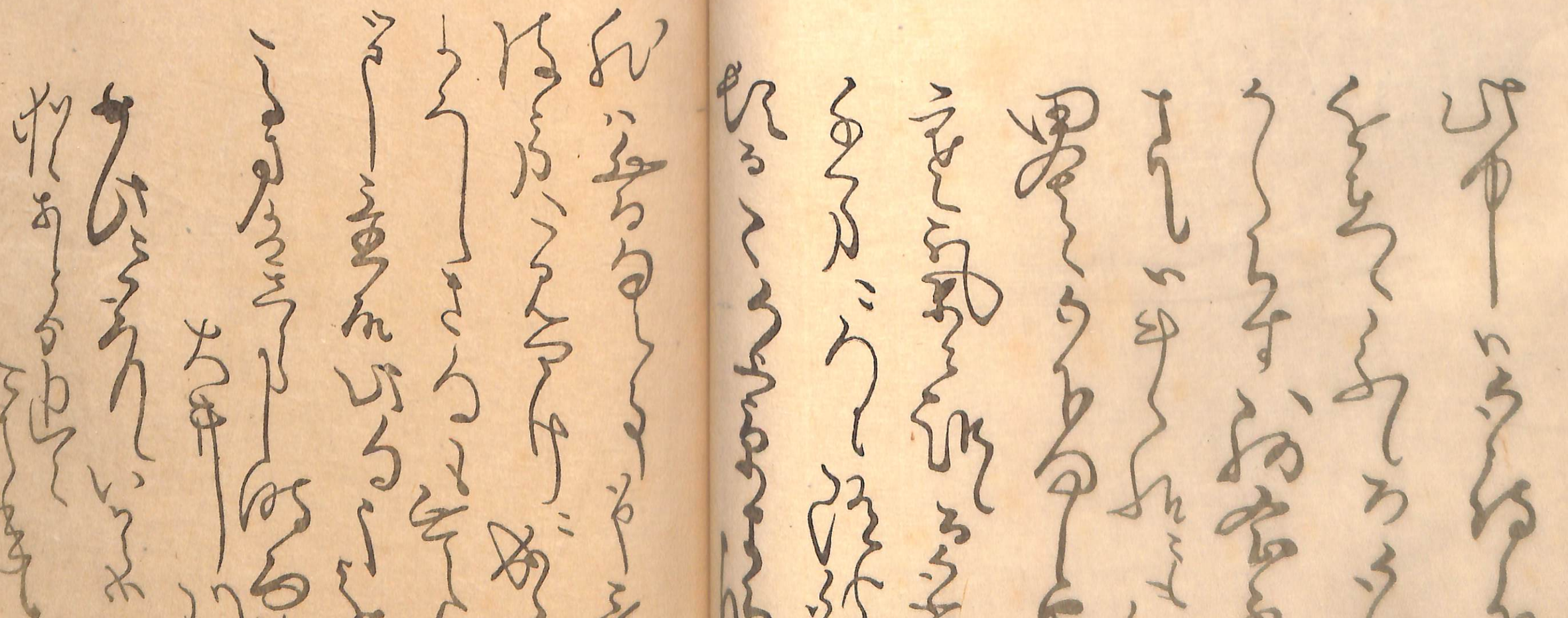
[illegible]

[illegible]

[illegible]

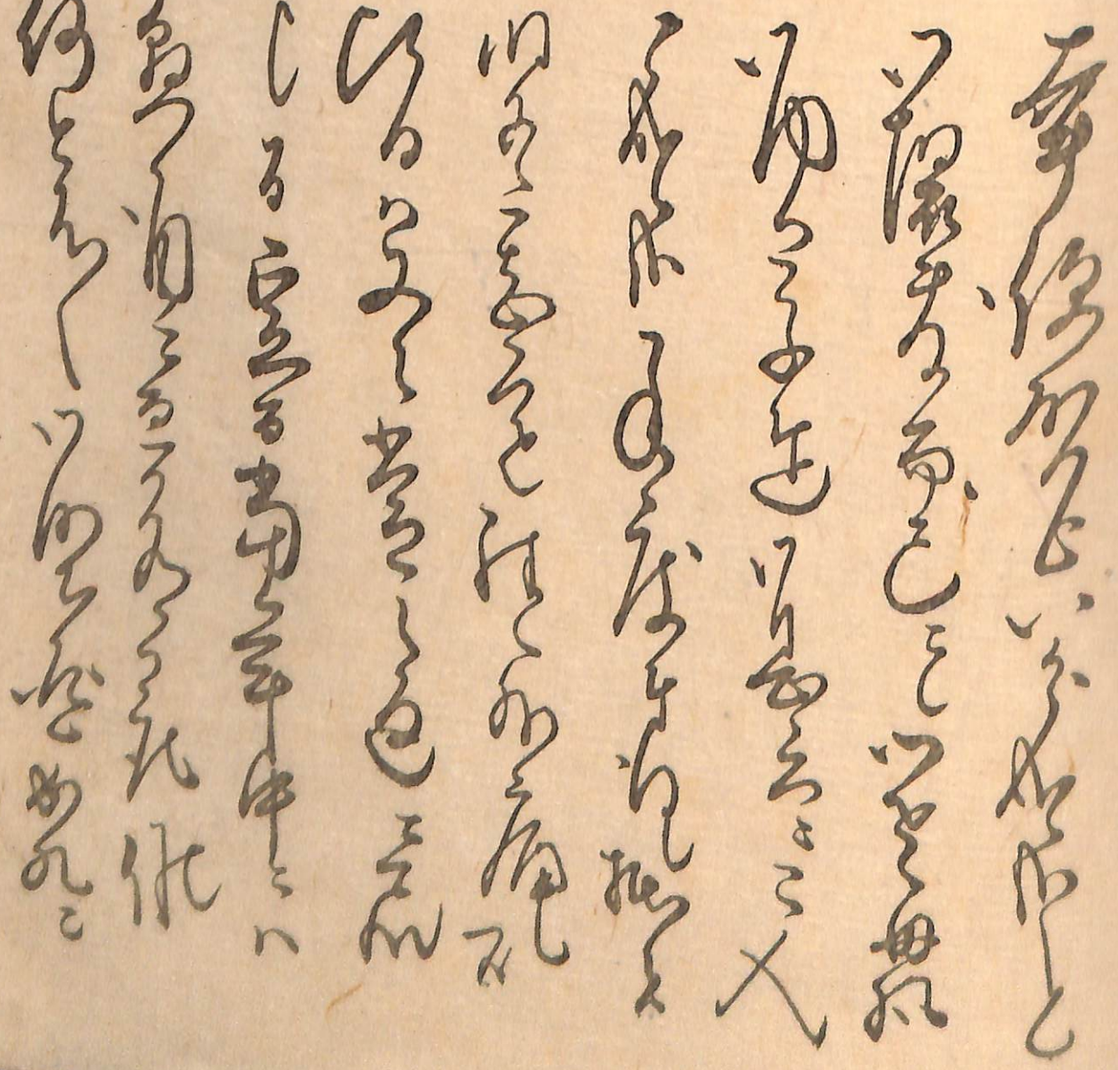
[illegible]

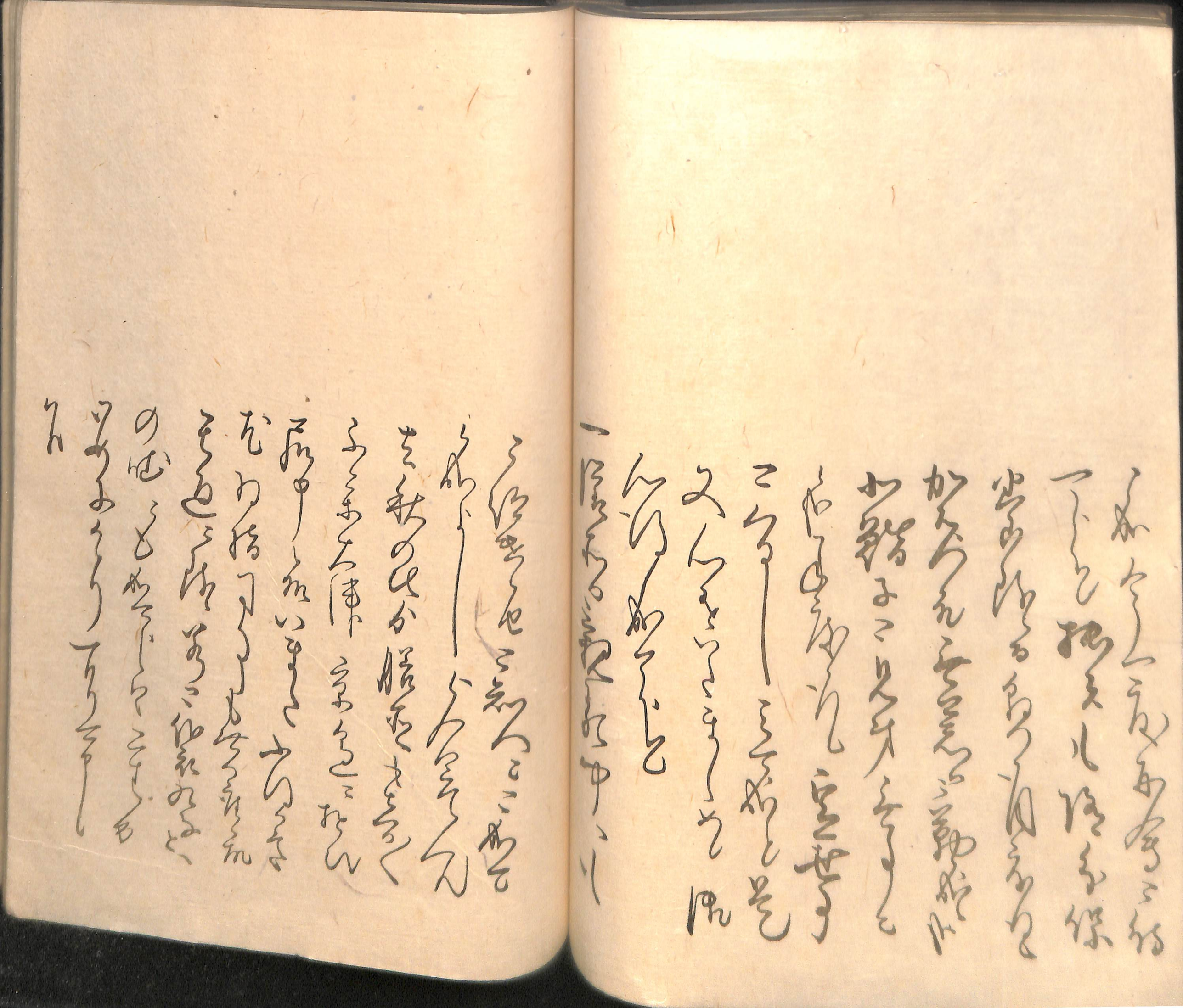


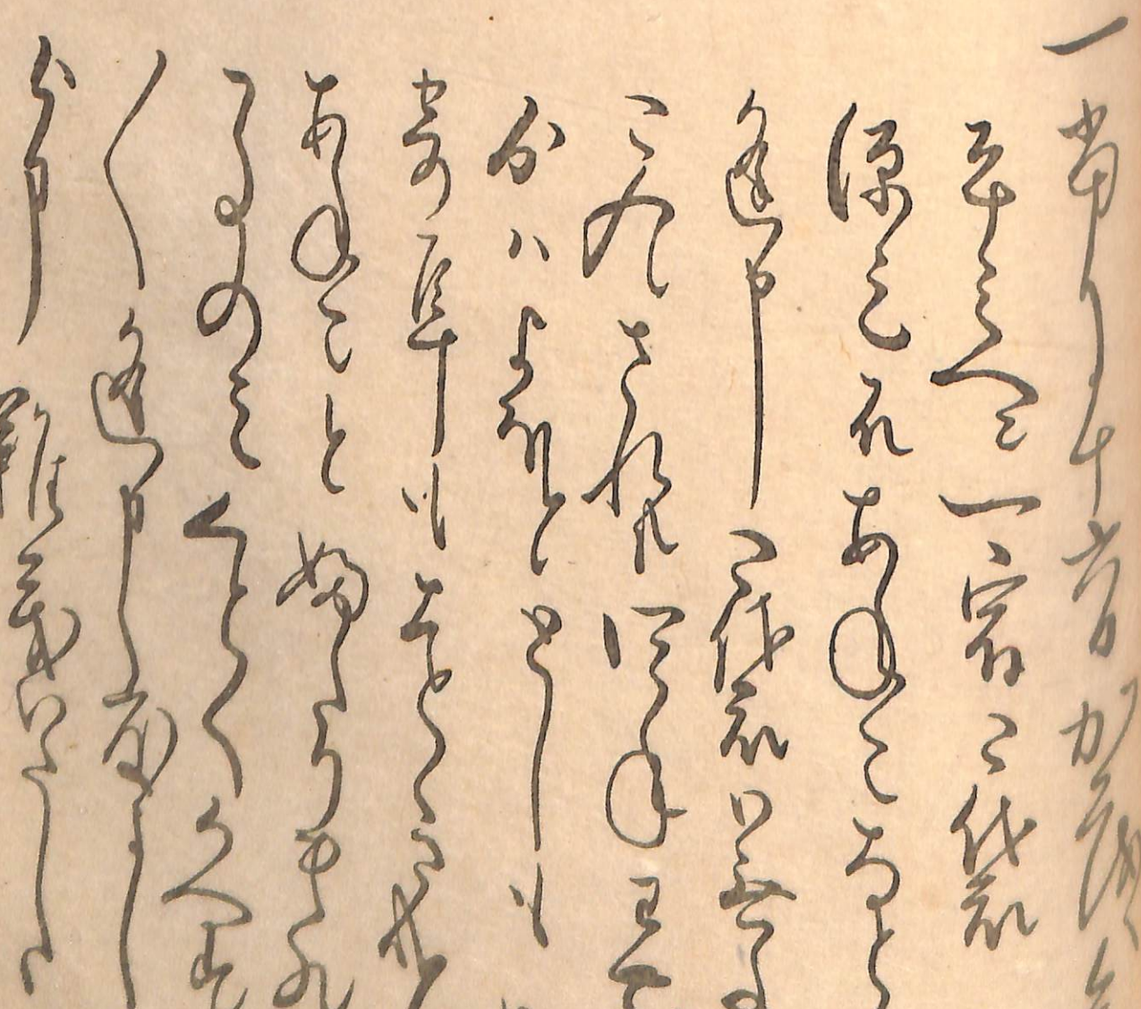


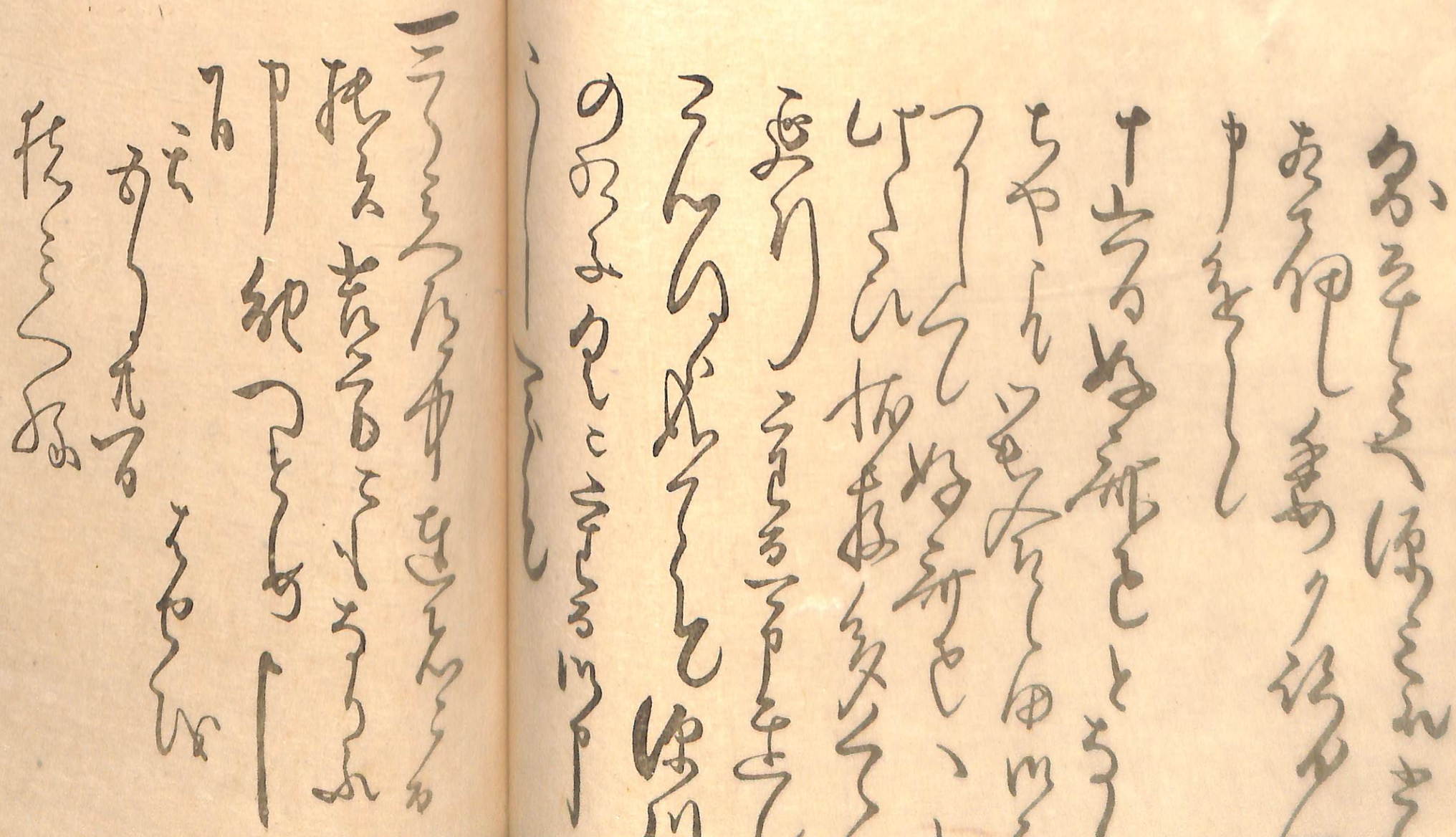
かやうにて唐にはしくおよふ
なきことの毒になりて当る
ことに墨なとつけたるハ膠の経
をとれ離しけ膠の後の形
研すへん墨地よろしく候ても
ありしもありて猶書
善膠ハ也ぬ色けものこと
大かきたる膠にもあらす合
ものかたにて花子のまへの
筆はまゆかしり所いれ
こゝしてかきまへとをみ
深く

よろしき紙なともてし
洞にて由ことありてをけ作
わすれ石積大なる紙箔
なかるへきことす扇にて屏風
大用のあらはなりてし
あるまゝのあらそもかけな
あはれしゆ筆のちかし由
其しものけし紙をも覧
おもひかくし給ふあ宗
こゝろあひかし下









一扨師にはいろ/\あとこゆへ
昔よりしけ学問経を
云合し人のまにゝ
あやまりて根は
子細人よきろうゐる
事に寫をこつとめ
（ちゝしてあはし家親
此給師よりはしりた時
同門此語をいよる

と蝶子境にけるあやし
承け給根えほう
戸らせし事なの毒
教あるし今ちて見い
略寫をふ急あと
会え給ありとも
も合念然人なるを
ら抑陣りくこめそて
ふれし
一六しられ心当てなれ

こゑちをしのりまへ候

一 此方京大坂倉入
諸品かけあつまり
日々宿々登り下り
大勢の往来に候

一 諸色工手間分
やすく相なりぬに
これ有てこそけりし大
しき事自ら御申
ざしき一々しても宜しき

かゝる御時節之候

よろし

一 宗旨之義ハ是より
以ての外にて宜しく
御存知も有之候よし
奉りそろしく候よし
出家に召われて

六月吉日　何某　下

様

[illegible]

伊勢物語十四

内閣文庫

芝屋抄書

一諸禮修止

一生長遠之

倡聲先

一一句

一句

雪月義一句

右二十條

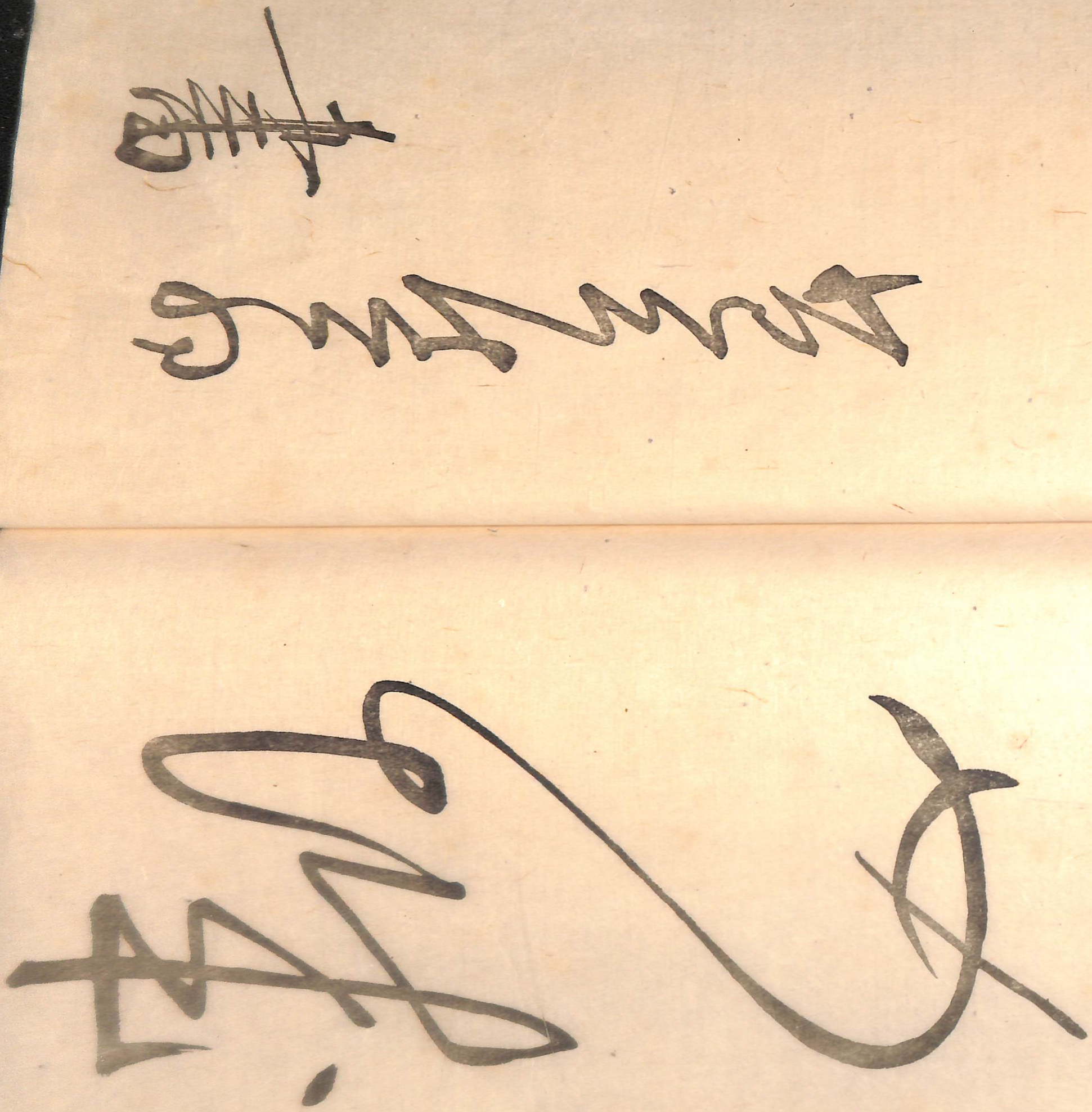
طبع دوم

مطبع شاهنشاهی دار الخلافه طهران

در سنه ۱۳۰۱ هجری

序

跋



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

6194
38 3. 14